

マオウを中心としたウイグル産生薬及び 安国生薬市場調査旅行記 (4)

金沢大学大学院自然科学研究科・ウチダ和漢薬
堂井 美里

2011年7月3日。我々は新疆から北京に戻り、昨夜からホテル「翠宮飯店」に滞在している。7時半に起床し、8時半からバイキング形式の朝食を食べた。お粥は自分で好きなものを注文すれば、その場で作ってくれた。メニューも豊富で非常に美味しかった。食事後、御影先生は北京大学の先生と会う約束があるため、午前是我々だけで中国医学科学院の薬用植物園へ出かけることにした。

9時55分、タクシー2台で出発し、20分後には植物園に到着した。まず、目に付いたのは、片面ジソである。葉の表は緑色だが、裏が紫色をしている。ジソには葉の両面とも青緑色の青ジソと紫色の赤ジソに加えて裏面のみ紫色の片面ジソがあるが、陶弘景は葉の裏が紫色のものを薬用であると記し、片面ジソが本来の薬用種であると考えられる。

また、アサが栽培されており、穂状の雄花が付いていた。日本では大麻の原料であるアサの不正栽培は禁じられているが、中国では栽培のみならず野生種でさえ目にすることがある。以前、内蒙古にマオウ属植物の調査に行った時は、マオウの直ぐ横にアサが生えていた。

ダイオウもあったが、天池のものより元気がなかった。北京の夏は比較的暑いためダイオウの生息環境としては条件が良くないのだろう。この種も正品大黄とは異なるようである。

タイセイ (*Isatis indigotica* : アブラナ科) が黄色の花をつけていた。中国では根を板藍根として用い、清熱解毒作用がある。当研究室の中国人留学生は、板藍根が欲しいと言っていたことがあり、風邪の時によく使うそうだ。今回私は初めて板藍根の原植物を見た。

しばらく歩いていると、緑色の果実を目にした。大きな木で始めは気が付かなかったのであるが、それは *Forsythia suspensa* (レンギョウ) であった。

その他、キリンソウ (*Sedum kamtschaticum* : ベンケイソウ科)、オオダイコンソウ (*Geum aleppicum* : バラ科) などが花をつけていた。キリンソウの根を費菜と呼び、打ち身などに使用し、オオダイコンソウの全草を乾燥させたものを水楊梅といい、利尿、止瀉薬とされる。

我々は園内にある李時珍(本草綱目の著者)像の前で記念写真を撮った。李時珍の像は北京大学薬学



レンギョウ



キリンソウ